

第3回の議論 意見のポイント

- 地域とは、都全域・区市町村・中学校区・町会自治会
⇒地域の定義は限定せず、多層的に見ることが大事
- 小地域レベルでの福祉活動が東京は弱い。独居高齢者の孤独死が問題となっている。男性が小地域の貴重な人材になってほしい。
- 団塊世代は地域活動に期待されているし、本人達もやりたい。しかしこれまで地域活動をないがしろにしてきたことにより地域に入りにくい。そのギャップを埋めることがポイント。
- 東京都は先進的な事例をレビューしながら区市町村を支援、啓発していく。
- 事業を広報しても対象となるひと（団塊世代）が集まってこない。地域から求められていることをいかに団塊世代に届けるか。
- 講座という切り口だけでは集まらない。アクティブな人の関係の構築が必要。多方面（市民活動、社会教育）と手を組み拓げていく仕組みが必要。
- 団塊世代が地域活動に入るときの入口部分が重要。スムーズに入っていけない要因がある。それを踏まえた仕掛けが大事。
- 団塊世代は仕事がなくなったときのネットワークづくりから。

- 団塊世代の男性は自分の楽しみだけ。引き込むためには生きがい。地域社会の担い手であるという自覚が必要。
- 60 歳以上の人の社会貢献活動へのマッチングがうまくいかないという問題がある。実感として3～4年かかる。企業のセカンドライフ講座をキャリアチェンジを考えさせる場に。
- NPO や地域貢献活動は、企業で働いてきた人のほうがイメージを持ちやすい。
- 港区の事例がうまくいっている理由は、その地域に合った事業だったから。大学との連携がうまく行っている。
- 男の台所は集客力が高い。男の台所から発展して、デイサービスでの活動など輪が広がっている。
- イベント等をやる際は、対象者あてに情報が届くようにすることが必要。マスコミに取り上げてもらうことが必要。
- 自治会・老人会にいかに引き込むか、それには複数の仕掛け人が必要。東京では町会・自治会の中に入って近所付き合いをよくすることが第一歩。
- 団塊世代が退職してから急に社会貢献を、地域活動をは難しい。きっかけがあればいろんなことをやる。NPO が手ぐすね引いて待っている。
- NPO 側も引き込みたいが告知力が弱い。NPO の価値を体験、体感してもらうようなマッチングがあれば確実に団塊世代の意識は変わってくる。

- 企業から NPO へのトランスが必要。また、それに介在する人も必要。きちんと対応できる人。「コーディネーター」、「プログラムオフィサー」、「窓口」
- 会社から地域におりてくるにはプロセスが必要。効果的にするには何か介入が必要。団塊シニアに合うようなコーディネーターも方策。
- 団塊世代の企業 OB は利害関係を調整し、コーディネート機能を発揮できる人材は多い。
- プログラムを検討・実行するには、多層的に見ることが必要。全体にやって効果があるものと、狭いところで効果があがるものがある。